

恨みこもる左近の兜

300年も続いた江戸幕府が敗れた戊辰戦争で野辺地の鳥井平が戦場になりました。

新政府の津軽軍は、総大将が木村繁四郎で、180人の兵士を率いて攻め込んできました。

迎え打つ旧幕府の南部軍は、大将が栃内与兵衛です。兵士は200人で戦いました。兵士の数では南部軍が多いのですが、馬門から代官所へと攻め込まれた。ただちに押し返しましたが、また、攻められました。

激しい戦いも、いよいよ勝負の時がきました。南部軍が鳥井平まで津軽軍を押し返し、にらみ合いとなりました。じりじりと一歩も譲らず右に左にと動く中で、その動きがとまりました。

その時、ひと際目立つ兜をかぶった勇ましい武士がおどりでした。

「我こそは、津軽藩士小島左近貞邦である。いざ勝負」と名乗りをあげました。

南部軍からは、凜々しい若武者が進み出ました。

「我こそは、南部藩士七戸の小原末造なり、いざ勝負」と受けて立って、一騎打ちとなりました。

火花を散らす刀の打ち合いが続き、にらみ合い、鏝競り合いとなり、勝負はつきませんでした。

両軍の大将も兵士達も、身動きせずに見守っていると、南部軍の腕っ節の強そうな兵士が助太刀に立ち上がりました。

しかし、兵士は、二人の藩士の必死の戦いにどちらが南部藩士か津軽藩士か見分けがつかせませんでした。ただ、よく見ていると馬門を背にして力を振り絞っている藩士に気付きました。

そこで、持っていた丸太棒で思いっきり足を払いました。思わず左近はどっと倒れました。

今こそ勝負とばかりに小原は、大上段から左近に切りつけました。左近は深く切りつけられ、苦しい吐息のなかで、助太刀した兵士をきつと目を見開き、すさまじい顔でにらみつけると、

「卑怯者、汝を7代にわたり、呪ってやる」と言い残して息を引き取りました。

津軽軍は小島左近貞邦を失い平内へと押し戻されて逃げ帰って行きました。

戦いが終わり、南部軍の小原末造は助太刀した兵士に左近の立派な兜を褒美に与えました。

兵士は、兜を土産に家に帰りました。床の間に「左近の兜」を飾り家族に手柄をたてたことを話しました。家の者達は、主人が手柄をたてて、無事帰ったことをとても喜びました。

兵士は、腕っ節の強さを家業に活かし商売は繁盛していましたがどうしたしたことが、突然、病気になり、あっと言う間に息を引き取りました。

主人を亡くしておかみさんは一生懸命働いていましたが、不幸は続くもので親が病気で寝込むし、子供は事故で亡くなるし、商売も思うようにいかず貧乏になっていくばかりでした。

見かねた問屋の旦那様がお金を貸してくれました。代わりに渡すものがないので宝物の「左近の兜」を差し出しました。

旦那様は、立派な兜を見て喜んで持って帰りました。

それから2、3日たつと、元気だった旦那様が急に体の具合が悪くなりました。医者に診てもらいましたが何の病気か分かりませんでした。どの医者も原因が分からない奇病なので薬もありませんでした。

困った姉様は、祈祷師にお祓いをしてもらいました。

祈祷師は、一生懸命祈り続けました。

そして、

「恨みの兜、兜を返せ」

と告げました。

驚いた姉様は、旦那様に内緒にして、急いで兜を兵士の家に返しに行きました。

兜を返すと不思議なことに旦那様の具合は日に日によくなりました。

姉様からその話を聞いた兵士のおかみさんは、久しぶりに戻った兜に不気味な力、左近の恨みを感じて怖くなりました。

おかみさんは、八幡様に「左近の兜」を納め拜んでもらいました。

しかし、左近の恨みは強く兵士の家はなくなり、家の者達の行方が分からなくなりました。

今では、「左近の兜」は恨みをはらし、八幡様で野辺地の人達の平和な暮らしを見守っているのだそうです。

どっとはらい